



NEWS LETTER NO.6

第6回 日本シニア小児科医連盟 会議開催にあたり

内容

1. ご挨拶

代表幹事 衛藤義勝

ご挨拶

日本シニア小児科医連盟
事務局幹事 衛藤義勝
(財団法人脳神経疾患研究所/
東京慈恵会医科大学名誉教授)

2. 第6回連盟会議について

第6回会長 小泉 晶一

3. 抄録

小泉 晶一
横谷 進

4. 幹事名簿

第122回日本小児科学会が金沢市で金沢大学谷内江昭宏教授が主催で開催されます(2019年4月19日~21日)。この機会に第6回日本シニア小児科医連盟総会並びに講演会を金沢大学名誉教授小泉晶一先生会長の下に4月19日(金)5:30PMより“**しいのき迎賓館 ガーデンルーム**”で開催する運びになりました。

65歳ご定年後のまだまだ活力のある先生方が中心になり、日本小児科学会の折に、毎年総会、講演会、意見交換会を開催しております。今年ですでに第6回となり、毎年会員も増えております。講演会ではこれまで活躍されてきた先生方のお仕事を中心に人生の生き方までご教示していただける、正に他の講演会では体験できないギュウと凝集した会であります。今回は金沢大学の小泉晶一先生には“小児科医の退職後の転身:発達障害児に寄り添う”又福島県立医大の横谷 進先生には“福島第一原子力発電所事故と甲状腺がん”の御講演を予定致しております。お二人の素晴らしいご講演を楽しみにしております。

この日本シニア小児科医連盟会議を通じて、少しでも我が国の子どもたちの福祉、健康の増進並びに母子保健の向上に貢献できれば幸いです。多くの皆さまのご参集をお願いします。



【日時】 平成31年4月19日(金)
17:20~21:00
(第122回日本小児科学会第1日目)
【会場】 しいのき迎賓館 ガーデンルーム
〒920-0962 石川県金沢市広坂2-1-1
電話:076-261-1111
【会費】 10,000円(意見交換会費込)

第6回 日本シニア小児科医連盟 総会 & 学術会議

第6回 会長:小泉晶一
(金沢大学 名誉教授)

第6回連盟会議について

第6回会長 小泉 晶一

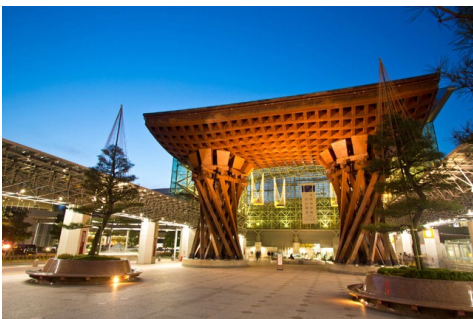
第6回連盟会議について

◆プログラム◆

17:00 受付開始
17:20~17:50 総会
18:00~19:00 講演会

講演1 小泉晶一 (金沢大学 名誉教授)
“小児科医の退職後の転身:発達障害児に寄り添う”

講演2 横谷 進
(公立大学法人福島県立医科大学
ふくしま国際医療科学センター、特命教授)
“福島第一原子力発電所事故と甲状腺がん”





長く石川県政の歴史を刻んできた旧県庁をリニューアルした「しいのき迎賓館」。正面は大正13年(1924)建築の格調ある意匠をそのままに、反対面は現代的なガラスの空間に生まれ変わりました。樹齢約300年(推定)の“堂形のシイノキ”をシンボルに、周辺の総合観光案内や、レストラン・カフェ、会議室、ギャラリーなどの憩い・交流の空間を備えた施設として、金沢の都心に新たなランドマークが誕生しました。



アクセス:

JR金沢駅から

JR金沢駅バスターミナル 兼六園口(東口)3、6、8、9、10、11番、金沢港口(西口)5番乗り場よりバスにて「香林坊(アトリオ前)」下車(所要約10分)、徒歩約5分

3. 第6回シニア小児科医連盟 講演抄録

2019年4月19日(金) しいのき迎賓館

講演1 小泉晶一（金沢大学 名誉教授）

“小児科医の退職後の転身：発達障害児に寄り添う”

私は2008年(平成20年)3月に金沢大学を定年退職した。たまたまその4月に、大阪大学、金沢大学、浜松医科大学の3大学連合大学院が新設された。目的は、世界から大幅な遅れでやっと日本でも注目されてきた、自閉症やアスペルガー症候群の、基礎、臨床研究であった。そして、その連合大学院を支える組織として、3大学にそれぞれ「子どものこころの発達研究センター」が新設され、私はそこに席を置き、大学院学生に小児科学一般を講義することとなった。もとより児童精神医学には全くの素人の私であったが、これ幸いと、それまでの小児がん血液学をかなぐり捨てて、連合大学院で開講されていた講義を全てオブザーバーとして受講することにした。医学医療保健学以外に、社会学、教育学、心理学、倫理学、薬理学、福祉行政学など、子どもの身体的発育、運動精神的発達に関する、理系社会系すべてを網羅するものであった。非常に多くを勉強させてもらい、私自身の患者さんを診る目を、全人的に広げさせるものとなった。4年間の勤務後、この受講を實踐して、臨床の現場を確かめてみるべきと考え、自宅に開業した。わかったことは、いわゆる発達障害、自閉症、ADHD、アスペルガー症候群、不安症と思われる児童生徒がいかに多いことか、その子どもの多くが不登校になっていることであった。そして、それに対して、現状の精神科医療が非常に貧困で、旧態依然としていることに気付いた。6～7年経過して、小児科専門医として何ができるか？いまだ模索中であるが、【子供のこころの診療科】なるミニクリニックでは、「寺子屋」的に、まずは身体を動かしながら感覚統合療法を真似し、心理教育、認知行動療法を見習いながら、宿題もみるという時間を、一人1～2時間、2～3週に1回とっている。現在10人程が通院中。とても現役の開業小児科診療所が経営的にやっていけるレベルではないが、退職医が半分ボランティア的に、核家族の両親を含めての子育て人生相談として実施すれば、格好の「きょうよう(今日用がある)」「きょういく(今日行くところがある)」になるのではないか。

演者 ご略歴 小泉 晶一先生

2008年3月 金沢大学を定年退職

2008年4月～2012年3月

金沢大学子どものこころの発達研究センター（大阪大学、
金沢大学、浜松医科大学連合大学院）特任教授

2012年5月 小泉クリニック「子どものこころの診療科」を開業し現在に至る

資格：

小児科専門医、自閉症スペクトラム支援士

2. 講演

第6回シニア小児科医連盟 講演抄録

2019年4月19日(金) しいのき迎賓館

福島第一原子力発電所事故と甲状腺がん

福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センター

甲状腺・内分泌センター長 特命教授

横谷 進

2011年3月11日の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故により¹³¹Iを含む放射性物質が大量に放出された。チェルノブイリ原発事故後に小児の甲状腺がんが増加したことから、福島県では子どもと若年者の健康を長期に見守るために2011年10月より超音波検査による甲状腺検査を実施している。対象は、震災時に県内在住の概ね18歳以下および翌年度に出生した小児で、約38万人である。事故後3年以内に先行検査、2014年4月から本格検査1回目、以後2年ごとに本格検査が行われている。同意が得られた対象者に対して超音波検査による一次検査が行われ、主に5.1mm以上の結節が認められた場合(約0.8%)に二次検査の対象となった。二次検査では日本乳腺甲状腺超音波医学会のガイドブックに基づいて穿刺吸引細胞診(FNAC)の適応を判定した。2018年6月30日までに202人が悪性または悪性の疑いと診断され、少なくとも165人に手術が行われた(うち乳頭癌162人)。先行検査における甲状腺がんの有病率は従来の数十倍とされるが、被ばく線量、年齢分布、地域比較、遺伝子型などからは放射線被ばくとの関係は考えにくい。ただし、福島県の結果から直接に結論できる時期には至っていない。一方、甲状腺がんには生涯にわたり健康に影響を与えない潜在癌が多いことも知られており、無症状の成人に対する超音波甲状腺がん検診は勧められていない。福島県の甲状腺検査は、放射線被ばくに対する強い不安を背景にして実施されてきた事情があり、一方では過剰な診断と過剰な治療を避ける努力も当初からなされてきたが、甲状腺検査をどのように方向付けしていくべきかは今後の重要な課題である。十分に理解したうえで受診を希望する県民に対して、質の高い検査と診療への継続性を確保することが求められている。

演 者 ご略 歴

ふりがな よこや すすむ
氏 名 横谷 進

1976年3月 東京大学医学部 卒業

2007年4月 国立成育医療センター 第一専門診療部長

2017年4月 福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センター
特命教授 甲状腺・内分泌センター長

[主な学会活動歴]

一般社団法人 日本小児内分泌学会 監事(元理事長)

衛藤義勝

山城雄一郎

青木 継稔

浅野 喜造

浅見 直

朝山 光太郎

阿部 敏明

荒川浩一

有坂 治

泉 達郎

伊藤 三吾

伊藤 進

猪股 弘明

岩田 力

上田 一博

植地 正文

内山 聖

衛藤 隆

遠藤 文夫

大関 武彦

太田 孝男

大野 耕策

岡田 知雄

岡田 真人

小田 慈

小泉 晶一

加我 牧子

金子 隆

神津 玲子

衣笠 昭彦

熊谷 公明

熊谷 公明

児玉 浩子

小宮山 淳

近藤 直美

佐々木 望

重松 陽介

城 宏輔

杉本 徹

鈴木順造

関口 茂

高田 五郎

高橋 弘昭

高柳 正樹

立花 克彦

田中 敏章

(財)脳神経疾患研究所先端医療センター/東京慈恵会医科大学名誉教授

順天堂大学大学院プロバイオティクス研究講座

東邦大学名誉学長、名誉教授

北海道大学大学院獣医学研究科

新潟青陵大学看護学科

東京家政学院大学健康栄養学講座

あしかがの森足利病院

群馬大学大学院医学系研究科

獨協医科大学小児科

大分大学医学部小児科学講座

篠原病院

香川県地域医療支援センター

いのまたこどもクリニック

東京家政大学こども学部

医療法人三生会 みちがみ病院

東京福祉大学社会福祉学部

新潟県地域医療推進機構魚沼基幹病院

東京大学名誉教授

くまもと江津湖療育医療センター

浜松医科大学名誉教授

琉球大学大学院医学研究科育成医学講座

独立行政法人労働者健康福祉機構 山陰労災病院

板橋区医師会病院 小児科

聖隷福祉事業団 法人本部

岡山大学名誉教授・特命教授

小泉クリニック（子どものこころの診療科・小児科）

東京都立東部療育センター

すずき小児科

神津小児科医院

京都府立医科大学地域保健福祉行政システム学

医療法人社団 葵の園・ヨコハマ瀬谷

横浜総合病院

帝京平成大学健康メディカル学部健康栄養学科

松本秀峰中等教育学校

平成医療短期大学

埼玉医科大学 かわごえクリニック

福井大学医学部看護学科健康科学研究室

すずき小児科

滋賀県済生会看護専門学校

福島医大看護学科 看護学部 生命科学部門

せきぐちクリニック

仙台オープン病院

千葉市療育センター

帝京平成大学 地域医療学部 看護学科

JCR

田中成長クリニック



谷澤 隆邦	たにざわこどもクリニック
濱岡 建城	京都府立医科大学大学院医学研究科 小児循環器・腎臓病学
橋本 清	日本医科大学
土屋 滋	東北文化学園大学
寺崎 智行	岡山赤十字病院
戸苅 創	名古屋市立西部医療センター 新生児 医療センター
富田 和巳	子ども心身医療研究所
富和 清隆	東大寺福祉療育病院
中村 肇	阪神北広域こども急病センター
仁志田博司	東京女子医大
沼口 俊介	沼口小児科
白幡 聰	北九州八幡東病院
濱岡 建城	京都府立医科大学大学院医学研究科 小児循環器・腎臓病学
浜崎 雄平	からつ医療福祉センター
原 寿郎	福岡市立こども病院
原 光彦	東京家政学院健康栄養学科
廣津 卓夫	ひろつ小児科
福永 慶隆	日本医科大学
福島 義光	信州大学
船戸 正久	大阪発達総合療育センター
古川 漸	実践女子大学 生活科学部 食生活科学科
星加 明德	北新宿ガーデンクリニック
細谷 亮太	聖路加国際病院
堀内 勁	聖マリアンナ医科大学名誉教授
松井 陽	聖路加国際大学大学院基盤分野
松石 豊次郎	聖マリア病院 小児総合研究センター・レット症候群研究センター
松尾 雅文	神戸学院大学総合リハビリテーション学部
真弓 光文	福井大学
丸山健一	群馬県立小児医療センター
三池 輝久	兵庫県立リハビリテーション中央病院
水谷 修紀	特定非営利活動法人 白血病研究基金を育てる会
宮田 晃一郎	社会福祉法人たちばな会オレンジ学園
麦島 秀雄	川越予防医療センター・クリニック
村上 睦美	東京都予防医学協会 保健会館クリニック
村田 光範	和洋女子大学保健センター
森川 昭廣	社会福祉法人希望の家 北関東アレルギー研究所
横田 俊平	フジ虎ノ門病院 小児難病リウマチセンター
横谷 進	公立大学法人福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センター
吉岡 章	奈良県立医科大学
芳野 信	久留米大学高次脳疾患研究所
安次嶺 馨	沖縄県立中部病院ハワイ大学卒後医学臨床研修事業団
伊予田 邦昭	福山市こども発達支援センター
井上 謙吉	医療法人 日吉いのうえ小児科
雨宮 伸	埼玉県社会福祉事業団 嵐山郷
永井 利三郎	プール学院大学教育学部

河 敬世	大阪府立母子保健総合医療センター
河野 斉	福岡徳州会病院小児科
河野 陽一	千葉労災病院
隅 清臣	隈クリニック
桑原 正彦	桑原医院
山野 恒一	四天王寺和らぎ苑
小川 實	小川クリニック
松平 隆光	日本小児科医会
杉江 秀夫	常葉大学 浜松キャンパス 保健医療学部
清野 佳紀	大阪病院
西 美和	三原赤十字病院小児科
大澤眞木子	東京女子医科大学 名誉教授
中畑 龍俊	京都大学iPS細胞研究所
長 秀男	南部地域療育センター
津留 徳	つるのぼるクリニック小児科
藤村 正哲	子ども療養支援協会 大阪府立母子総合センター
飯沼 一宇	NPO法人「子どもの村東北」
百井 亨	公益法人 丹後中央病院小児科
浜本 芳彦	浜本小児科
別所 文雄	日本医療科学大学保健医療学部
保科 清	山王病院小児科
門田 正担	春野うららかクリニック
柳澤 正義	国立成育医療センター名誉総長

